
異世界で奴隷になりました。—あれ？これって最悪パターンじゃね？—

夜啼優真

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で奴隷になりました。―あれ？これって最悪パターンじゃね？―

【Nコード】

N5320U

【作者名】

夜啼優真

【あらすじ】

俺、中村ソウは、トラックにはねられて異世界に来てにからろくな事が無い。

いや、以前から無い。妹の姫に身体的にも精神的にも苛められて近所や学校ではヤバイのだ。

で、本題。トラックにはねられて天国に来たと思ったらムキムキな男につかまって、そこで人身売買をする人だと知った。

奴隷の印を押されるわ、無愛想な双子が言葉で苛めるわ。まあ、

他にも色々と苦勞の連続なんですよ。

俺の初☆異世界苦勞語り。剣と魔法のファンタジー開幕！

空気読め。

私たちは今、「『ぷろろーぐ』なるものを言う」という使命を負っているのだ！

「えっと、本来、文章においての『プロローグ』とは、文章や物語の導入部のこと。

冒頭で内容の概略や背景について述べ、読者が内容になじみやすくするために書かれた部分。

導入部は、紹介文・序文・序説・プロローグとして記載されることもある。

W i k i p e d i a 参照

ということは、プロローグ＝導入部＝いろいろだね。」

.....

「.....」

あは☆

「嘘ですっ！スミマセン！意味を言ってしまいました！だから叩かないで！」

ここまできてプロローグに必要な事は名前しか言ってないではないか。もっと話せ！私が天才美少女だと言う事を！！

「けど性格は最悪——いや！もう凄いビショウジョだよ！俺にはモッタイナイくらいのジマンな妹さ☆（ヤケクソ）」

なぜカタカナが多いのかな？（黒笑）

「いや！もう俺はアシモトにもオヨバナイカキュウのソンザイだからさ☆」

そうか、分かってくれて嬉しいぞ。

（ぐはっ！！心がああああああああああ！！！！）
心がどうした。

「何でも無いです。」

なぜ顔を背ける。

「いや、あはは。あっ！『プロローグ』どうする？紹介文を先にしない？」

そうだな。そうしよう。

「「では！『プロローグ』をお楽しみください！！」

（えっ！姫言えたんか——ブチッ

と何か切れた音と共に『プロローグ』の自己紹介が始まった。

「ふふふっ♪兄の顔を想像すると楽しみ——」

（優真；姫くそれは虚しく出来ないぜ☆hahaha！なぜなら——）

「五月蠅いわ。遮るな馬鹿作者、占領させてもらうぞ。」

本当の『プロローグ』を始めるぞ

く中村 なかむら ソウく

なんとか、人間という種族の雄

高校2年の16歳、彼女いない暦も同じだ！

身長は174.9センチだ。150まであと1ミリだと嘆いているww

小3からMMORPGをやっている2次元信仰者だ。

MMORPGでのサブ職は奴隷だな、Mだ！！

本人は違うと言ってるが、かなりのMなのだ！！

虐められてあんあん言うぞ！ここは重要だ。

テスト点はクラスの平均丁度という記録を出し続けているという馬鹿だ。

小テストでも全国調査テストでも100%らしい（クラスメイト談）

もう、平凡通り越して平々凡々だ。

Mはどうかと思うがな。

とにかく平々凡々だ。

才能も良い所無いぞ。

主人公と言ってるが自称だな。はっ！（嘲笑）

変態だ。ロリコンだ。同年好きだ。年増し好きだ。誰にでも手を出すぞ。

「ふふっ♪こんなものかな、では次華麗なる私を紹介するか。」

（なかむら
）中村 姫（ひめ）

美女で11歳の小5

身長は150センチだ。

1年前からMMORPGを始めた（兄と同じやつをな）。

MMORPGでのサブ職は貴族。それ以外に何がある。

兄がMだから私はしょうがなくSをやっあけてる。

そうしなくては兄は欲求不満が溜まりあんな事やこんな事をやってしまうからな。

兄とは違って成績優秀

テストでは95点以上しか取らないぞ。

運動神経も抜群

大会ではトロフィーしかとらん。

今は全国大会出場だ。

モデルも多少やっておるが面倒だな。

何でも出来る私は兄とは違ってもててるぞ。

下劣な奴らを彼氏にしようとも思わんがな。

本当の主人公は私だ。

なんでもすぐ憶えるし出来るようになる。

何でも出来る最強チートの法則というやつだ。

この世の神だといっても過言ではないぞ。

「ふうっ。終わったな。

兄は変体という称号も読者から得ただろう。

私はこの世の神という称号を得て当然だな。」

（優真…えくと、久しぶりでゴザイマス・・・？）

「どうした馬鹿作者、数分前に話したばかりだろ？」

（優真…えい、あ、うん。）

「なんかあるのか？」

（優真…うん。読者が紹介文だけじゃ内容が無いって離れそうだから

――）

「なにっ！！？離れるとは命知らずな！」

（優真…だから！物語の始まりとかをしましょう！！）

「嫌だが同感だな。」

「という訳で、物語の始まりを思いっきり楽しんでくれ」

（優真…よろ——ブチッ！

【異世界の始まりと】

くソウく

「姫ちゃんみたいな妹が欲しかったよ」

「あげる！」

「「速っ！」」

友人Aの申し込みを即答すると友人A，B，Cがツツコむ。

A，B，Cはツツコミ担当で、ボケが俺だけなのだが・・・

「可愛いし、すごいし、良い子だし、萌えだし、ロリコンにはそそられる子じゃん」

「俺ロリコンじゃないし、あいつのツルペタな体見てもどうも思わないし」

「「「なにっ！！！」」」

A「ツルペタはロリコンの良いところだ！！」

B「お前もロリコン一筋じゃなかったのか！！？」

C「見ているのか！！見つかったら犯罪だぞ！だが、今度写真取ってくれ！」

前言撤回、正反対だわ。今、とてつもなくツツコミたい欲望がふつふつと——

「変態どもめ！！！！A、俺はツルペタに興味は無い！B、勝手に決めるな！C、服の上からでも分かるだろ！？ついでに警察に突き出してやろうか！？」

3人は、口々に文句を言う。

「ソ、dragon×timeでソのいつてた噂見つけたよ」
教室前のドアから現れた幼馴染の瑠伊るいが俺たちの輪に入ってくる。
dragon×timeっていうのは俺が小3からやってるMM
ORPGで、世界は広いけど内容が薄いというゲームだ。日本では、
5000ちょと越える位の人がやっている。

瑠伊は中2から始めている。このゲームの情報屋みたいなものを
趣味でやっている。

ついでに瑠伊は女だ。A・B・Gは野郎だ。

「おう、ご苦労」

「「「なにっ!!」」」

忘れてたがこいつらもやってるが、高校になってから知り合った
からいつからやっているのは知らないが・・・

瑠伊とはあまり面識は無い。

「行方不明になった人のキャラクターがdragon×timeで
動いてるんだって。目撃証言者はいないらしいけど。」

「へー、行方不明者っていつ頃から?」

隣でA・B・Cがうおーとかおおーとかうめしてる。

「えっと・・・導入の1週間後ぐらいからだって」

バージョンUPことだが、dragon×timeではよくあつ
た。

レベルの上限と、お粗末なゾーンと、道具を半年に1回追加され
るのだ。

今回は2ヶ月前にあった。

「他になにか情報とかはある?」

Aが言う。

（おい、目がマジになってるぞ。BもCも近寄りすぎだっ!）

「NPに意思を持つ人が出てきて、その人がそれに関係する事を教
えてくれるん——」

「今日からの目標はそいつを見つけてやる!!」

「YES!!」

(Aなに言ってんだアあああああ!! BもCも!!)

「ちょ! 待て! おまえ達はこの世に欲求不満なのか! ?」

「ああ! 欲求不満だ!! 異世界は男のロマンだろ。あっちでハーレムつくるぜ!!」

「「そうだ! ハーレム最高だ!!」」

(マンガの見過ぎだ……)

「どう思う思考だ……」

「異世界Ⅱ助けるⅡハーレムの法則だろっ!」

「……アホだ……」

「だね……」

瑠伊は分かってくれたか。

「理科始まるから準備しろ」

生徒から「小学校みた〜い」という野次が聞こえた。

それと共に、俺たちは自然に別れ、各自で準備と席へついた。

(チェシャ猫が2ヶ月前から連絡が取れない。)

チェシャ猫というのは、dragon×timeでのプレイヤーネームだ。彼は^{うえだくおん}大のアリス好きだった。

本名は^{うえだくおん}上田久遠、大学2年の男だ。現実でも面識がある。

俺とチェシャ猫、姫でdragon×timeを週に2日は一緒にやっていた。連絡は週に4回はやっていた。用事が出来た場合はあらかじめ連絡をくれるか、1・2日後に連絡をくれた。

(関係ある……かな?)

噂の報告は、けっきょく最後まで聞けなかったためチェシャ猫と関係あるか。

——と、大きな車独特のクラクションが耳をつんざく。

(トラックだ)

が、気づくのは遅すぎた。

気づいた時のトラックとの距離は——

——5 m

トラックは迫る。

なにも考える事が出来なかった。

俺の目は歩行者信号の青が点滅しはじめたのを写し、俺の意識は途絶えた。



俺は、ただ広い草原に仰向けで寝転んでいた。

(え? なに? 天国? おいおい、それは宗教だけにしてくれよ)

俺は起きるまでもなく空を眺める。

(あゝ蒼い空、白い雲、空気がおいしいし楽だわゝ……まるで天国……)

比喩が彼の宗教になっているのは言うまでも無い。

(死ぬ時衝撃もなにも感じなかったけど普通なのかな?)

誰も答えてくれない問いを心の中で問いた。

（こんなこと考えるなんて自分らしくない！ええい！天国ライフを楽しんでやる！）

目を閉じると視覚が分からなくなり、そのぶん他の感覚が良くなる。

風や草木、遠くからの鳴き声や近くからの足音――

（え？なに？足音は死亡フラグだって？ここは天国さ☆もう死ぬこともないよ！

あれ？体がフワツと・・・・・・・・いたたたたあああああああ
あああ！！！！）

「暴れるなよ。」

背後から低く唸るような服従させる声。

うつ伏せ状態で腕を捻られている状態で暴れるなという方が無理だ。

足をばたつかせて暴れると、先程と同じ声の舌打ちと手伝ってくれという声が聞こえ、突然足を抑えられて足の血が圧迫されるのが分かった。

俺の腕と胴に力と体重も加わり、更に痛い。

俺は混乱していた。

天国だと思っていたら生きてたらしい、それに続いて、訳の分からないことが起こっていたからだ。

俺の様子で駄目だと思ったのだろう。

俺の腕からソレの手が離れていったと思い腕を動かそうとすると同時に意識が消えた。

「…………きて…………起きて……………」

耳の近くで少女の声が聞こえた。きっと姫だろう。後が怖いが無視してやる。

眠いのに「起きて」と連呼されはつきりいつてうざいぞ。

「起きて!!」

耳の近くで叫ばれたがこんなのは可愛いものだ。

それと共に眠さの限界がきた。

寝たいという欲望が頭の中を渦巻き、今日の姫に付き合わなくてはならないことを瞬時に巡らせる。

(無い!寝れるZE☆)

あとは姫が機嫌を損なって俺に被害がこないように言うのだ。

身を守るためについた技だ。言葉にするまでは無意識の動作だ!

「……………まだ夜中ですよ……………それに、今日は見たい深夜アニメ無いです……………お休みそしてさよなら……………」

「あに……………め?じゃなくて!起きなさい!」

バッチーーン

「!!!本気でやること無い——!」

「立って!」

しょうがなく立つと、俺の手を引っ張って「走って」と命令されて走り始めた。さて、今回何回目だろうかという思いが浮かんだが何かに躓きそうになり止めた。

手が何時の間にか繋いであるという状態になったのはギャルゲーのイベントだろうか?

姫の耳に届かない(後で殺されない)ことを祈りながら黙って走った。

余裕が出てきた頃に周りの様子を見た。

いかにもテレビで見る横幅がとりえの洞窟です☆って感じで、一

定の距離にぼんやりとしたお粗末な橙色の光が浮かんでいた。文字どうり浮かんでいたのだ。ありえないことに少し驚きつつ足を進めた。

走る地面は小さな刺を踏んでいる様で痛かった。きっとあまり使っていないのだろう。使っていたら靴などで擦られたりしてそういうのはあまり無いはずだ。

状況と場所は分からんがどういいう場所は分かった。

続いては前を走る少女だ。

始めは姫だと思ったら背が明らかに姫より高い、それと、思い返してみると姫の声じゃない。姫の声は（俺にだけ）もっと悪意を含んでいる。

髪は腰ほどの長さまであり、土や埃で汚れているが、光を通り過ぎる度に髪が透き通る様に綺麗だ。

たまに俺を確認するために振りかえった時に見た顔は14・5歳ぐらいだった。

ギャルゲーのキャラみたいな容姿だ。例えるなら、何でも出来る生徒会的なキャラ？

体力はあるな。かれこれ10分くらい走ってるからな。

「————っ!!」

——ドンッ

うん、この擬音語が合うくらいの勢いでぶつかった。

「ごめん。ゴメ——」

『静かに!』

俺の口を抑えて、彼女は口パクで言った。俺って口の動きで理解するのけっこう得意だよ。

そして、さっと洞窟の窪みに俺を誘導して隠れた。

運が悪い事に分かれ道も大きなツララみたいな岩も無いため見つ

かりやすい。

さっと見たら数十メートル先に貨車があり、いかにも2次元でよくいる盗賊です☆ってかっこの男が5人ほどいる。

（こういう時って逃げた方がよくね？見つかる〓隠れるところが無い〓見つかったら終りの法則だし）

俺の頭の中で単純で馬鹿な法則が出来たと共に体が無意識に動いた。

その際に手を離した。

『ちよっ！見つかったちゃう！』

すっげー不安そうな声で言うもんだからギャルゲーにリンク

俺は有無言わず走った。

奴らと反対の方向に……

例えるなら南に奴らがいて、少女は北西にいるから、そこから更に北北東に行った。

（横幅がとりえの洞窟はこういうことが出来るから便利だぜ☆って「来たー！ー！ー！ー！ー！」

これで行かない盗賊は居るか？それに見つかったからって叫んだよ……という少女の心の中のツツコミは喉からでなかった。いや、ツツコミたかただけど……

ズザアアアア！！

はいっ！俺は頭からのスライディング入りました。

あっけからんと見る少女と盗賊

そしてなにも出来ないまま捕まった俺

こんなブローグありますか？―俺は駄目だと思います―（後書き）

主人公の言葉を消される、無視されることが多めです。

（^ p ^）／オワタ

|| || || ||

まず、あらすじについて。

まだ決まってません。ボチボチ新しくしていくつもりです。

誤字脱字がありましたらご報告ください。

1. ふぁいや〜ぼ〜るっ♪

〜ソウ視点〜

1人で捕まっています。

筋肉盛りもりの坊主頭の盗賊に・・・もりもりすぎて笑えます
W W W。

「ぷくくっ・・・／／／／ふっ／／／／・・・ぶはっ W W W
／／／」

縄で拘束され、担がれてもなお笑いつづける俺、だんだん盗賊が
可哀相な目で俺を見ってくるZE☆

(ヤバイ・・・ W W W ・ 息が W W W ／／／ W W)
もう何に笑っているのか分からなくなった。

数分後

チーーーーーン

死んだ時のこの音が合いそうな状態で俺はグッタリしております。
体が動かないんですよ。

ついでに牢屋の中・・・いやっ！ついでじゃないよ！事態は
深刻化してるよね！！

「坊主！、笑い死んだか〜」

人の良さそうな若い盗賊が牢屋の外にしゃがんで俺を観察（？）

しながら笑う。馬鹿笑いでも嘲笑でもなく単純に楽しんでる笑いだ。

「あゝ……死んじゃいましたねえwww」

「そゝか、そゝかwww」

なんか気が合う。

「確かにザジャの筋肉っぷりには笑えるけど坊主の爆笑っぷりは新記録だよ」

「おお！じゃあ世界記録だ！」

あの筋肉男はザジャっていうのか。合ってるぜ☆皆あの筋肉っぷりに笑うのか、それにしても世界記録は嬉しいぞ♪

「ぷぷぷ……／＼世界記録www」

「俺は世界記録保持者だあああああああ！！！」

疲れた体を奮い立たせてかっこつけてみた。

「あははははははははは！！！」

彼爆笑。彼の後ろ見たら仲間とおぼしき人たちが（俺をだぞ！）

可哀相な目で見てくるのも堪らん♪

「お頭、感情注入したら駄目ですよ。」

「へゝきだよおゝぷぷっwww」

「オカシラ？」

「坊主ゝふふっ、久しぶりにすごい笑わせてくれたから奴隷としては幸せな生活が出来る場所に売ってあげるよ」。

不吉な言葉が聞こえたから右から左ゝ、そしたら内容分らないゝ「？」

「労働目的の場所だよ。今厳しくない労働があって奴隷が欲しいって人がいるんだよね。条件が印押すのと少しM体質と変人じゃなければいいらしいよ」

不吉な言葉は変換よ♪（セーラー〇ン風）

奴隷Ⅱトレイに聞き間違えちゃえ☆あれ？変換ちゃうくない？まあいいや☆

なんかボソツと変人じゃない？という声が聞こえた。

オカシラさん達は落ち着くと牢屋の鉄をへだて俺に向き直った。

「まあ、丁度その客のがあと1人だからいいよね。」

「ええ〜」

すごく不満そうな顔で言うとおカシラさんに笑いながらこずかれた。

「Sな客のがいいのか」

「どっちもや〜だ〜。そのお客の条件痛そうだから。」

「一瞬だから一瞬」

「まあ、それなら・・・ところでここ何所〜？」

「ククツ・・・今更かい、坊主のテンションいいな〜。」

「いや〜、よく言われるよvv」

「はははは」

「はははは♪」

あ、オカシラさんまで可哀相な目で見られてる。

「ゴホン」

「ははっザジャどした？」

「奴隷の印を押さないのですか？」

「な・・・何でやるんですか・・・？」

想像出来るけど

「うん？坊主怖くなったか？熱した鉄を押すんだよ」

「後がジンジンするが痛いのは押した時だけだ。まあ、動いてずれたら綺麗に出来るまでやるけどな。」

ザジャ酷っ、聞きたくなかった。

「ジンジンって・・・痛い証拠じゃ・・・」

「まあ、それ受け入れなければよほど運が無ければ良いところには

いけないな」

「買う人って物好きが多いからな。」

「何時いつやりますか？」

俺にとってヤバイ空気になってきた。

「今からやる。準備出来てるか？」

ヤバイヤバイ

「出来てます。」

イタイノキライ

「そうか。ザジャは押す準備を他は坊主を連れてきてくれ。」
すぐ横の牢屋の扉が開く

体が動かなかった。

「うん？どうした坊主、静かになっちゃって、自分の足で行くか？
そしてくれば坊主もやつらも楽なんだが。」

「……自分、で……歩きます……。」

「おまえけっこう根性あるな。」

ふっとオカシラさんが笑い、牢屋ごしに頭をぼんぼんとする。



・・・

割愛しますよ。

ええ、残酷ですからね。

見たくないでしょう？

いや、俺としては『残酷描写あり』にしたくないわけで・・・純粋な人もみちゃってっるから、ね。

嘘です。すみません・・・

プライドを壊したくないので割愛です。

自分が可愛いんですよ。はははっ

で、今俺は馬車らしきものに乗っています。

俺と、双子（男の子と女の子）と、見張り役のザジャがいます。

柱から、双子と俺の右足にかけて申し訳程度に紐が結ばれていた。がんばれば簡単に取れるであろう緩さだった。

窓も無い、荷物も無い、おしゃべりも無い。ただ揺れて待つてるだけ

（揺れが気持ち悪いよ。前の双子睨まないでよ。オカシラさん俺見て笑わないでよ。ザジャ可哀想な目で見ないでよ。

拘束とかされてないけど、それより非道なのが酔いだと思うんだよね。

うん、何が言いたいかって、俺は重度の酔いがあるのさ！（ぶんぶん）

「元気じゃん」

「はもった！双子の奇跡到来っ」

「はもることは他人でもある。」

「なんだってえ！！？初めての1言目ではもるなんて100%やん！」

「馬鹿か。」

「馬鹿なんだよ。」

「同じく」

上から、双子男の子、双子女の子、ザジャ

「ほら、思考回路がいっしょ！・・・あれ？　そういえばどうして思ってること分かったの？」

「馬鹿のアホだ」

「本物ね」

回答になってない双子の苛めの言葉が続いた。

「いきなり『可哀想な目で見ないでよ。』と言い出したの自覚無いのか？」

「Yas！」

ザジャさすが！

「いえす・・・？」

双子のどちらが呟いた。

「？」

え、なに？　分からないの？

小学生でも分かる基本だよ。

「世界共通語使え」

「世界共通語は英語だよ。」

「えいご？　さっきのは古代語だろ。」

「は？」

古代語といったらギリシア語とかだけど英語は終わってないぞ。

「分からないのか？　最初に出会った所は古代の神殿だろ？　どうして居たんだよ。」

「死んだら来ていたから分かん。」

ザジャが意味分らないという顔をする。

双子はじつと俺たちの話を聞いている。

「はねられて死んだと思ったらそこに居たんだよ。」

「はねられるって・・・馬車に？」

「ちがうちがう。車だよ。」

「？」

ああ！どうして分からないのだ！！

「ああ、まあいいや。馬車みたいなものって解釈で。

で、知らないうちにこの国？にきたからさ。色々教えてよ。」

この世界は元の世界とは違う。だから一応、異世界と仮定している。

自分の居場所が違うなら作ればいい。それにはまず、世界を知ってからだ。

必要不可欠な情報を知らなければ、絶対に悪い方向にいつてしまう。姫のおかげで身に付いた知識だ。いつも厄介ごとを押し付けてられて、情報を集めないで何度も悪い方向にいったのは、何度もあった。

「まずは常識……。俺さこのとおり変人っしょ☆だから最初から学ばなくちゃね。」

「「確かに変人だな。」」

なぜかザジャと双子の声が重なる。

「ひどいよ、皆がいじめるう」

「本当のことを言って何が悪い。」

「うわぁ双子男の子君には道德というものを知らないのかい？」

中学入りたての頃に習ったよ。男の子が太った女の子に本音を言っ
て、他の女子が反論したら男の子が『本当のことを言っ
て何が悪い』って言ったら逆に男女問わず皆から虐められるようになる話だ。
思いやる心は大事だよ。本当の本当にね。

「知ってるが実行する馬鹿ではない。」

「そんなこといちいちしてたら食われるよね。」

双子おーーーーー！見る限り年は小学校中学年なのに子供っぽくない！！

「おまえが今まで食われなかったのが驚きだ。慈悲行為をして食わ

れないのは勇者くらいなのだな。」

「ふーん。勇者ってなに？」

RPGの勇者？ 勇気のある人？

「・・・・・・そこからだよ。」

疲れた顔するザジャ。早いぞ！ 旅はまだまだだ！

「赤子に教えるようにねっ」

「赤子に内容が分かるとでも？」

「赤子の頭脳には無理無理」

比喩しすぎただけなのに双子の正確な反論が心にぐさつとして痛い。

「うゝー」

頭を抱えたい。

「まあ、教えとこう。会ったのも縁だからな。」

俺の中で、ザジャは根は良い人という箔が付いたぞ。情報は俺にとって全てだ。

「ありがと！」

「なんか、空気を読むな・・・」

「そりゃあそうだよ。生死に関わるんだから。」

本音を言くと「お前らしくない発言だ」と呟かれた。皆が沈黙する。

車輪が地面を進む音がする、揺れが出る。

ぱんつという両手音を鳴らす。

「ほゝい、どうして黙っちゃうのかな、教えてくれるんでしょ？」
陽気に言うとザジャは苦笑し、双子は表情こそ変わってないが不
陰気が良くなる。

「ああ、まず何を話せばいいんだ？」

「基本でも幅広いからねゝ．．．あっ！さっきの世界共通語とか古代語のことをいいかな？」

ザジャがうなづく

「そうだね、まずは世界共通語のこと。言語の名前は？国ごとなどに言語の種類あるか？かなゝ」

問いたと同時に「1つづつ言ってほしいんだがな．．．。」と言われたが、続けて答えてくれた。

「非常識すぎんだろ。まあ、いいや。」

2つ目から答えさせてもらう。国ごとに種類は無い。世界共通語の1つだけだ。何種類もあったら生活が困るだろ？2つも3つも覚える羽目になっちまう。俺にはそんなにあったら覚える自身が無いしな。」

言葉を付け足しながら選んで言う。

確かに、だが俺の世界では当たり前なんだけどね。

「次、1つ目の回答、難しい問いだな。」

まあ、世界共通語は世界共通語だ。名前なんて無い。以上だ。」
「ん、分かった。」

「和製外来語ってある？ああ！それじゃわからないでしょ！えっと、例えばレーズンパンとか．．．テーマソング？とか、コッペパンとか。」

なるべく身近な単語を上げると、手応えありだった。

「共通古代語だろ、分類としては世界共通語に入る。古代語では無いが、古代語に似ている単語だな。言語学者が古代語に憧れて似せたのを勝手に作って広まったのが始まりだからな。」

「．．．単純．．．」

ボソッと呟いたのは双子だった。分かるよ、その気持ち！色々ツツコミたくなるよねゝ。元の世界がもっと細かったからだと思うけど、多分俺の方がツツコミたいよ！

「俺も最初はそう思ったが、言語の成り立ちを知らない人はそうだろうな。」

と、ザジャが苦笑する。

「人間の創造力では当たり前のことで、人は作り出すのが好きでたまらないから無いものは考えて作り出し、生活をより豊かにする。」

自分には語学の想像なんてどうでも良いけどね。

“ 神話も、創造で出来ている。創造したものに創造されたと考える。神なんかいない。縋る言葉にすぎないし ”

神話のことまで出そうとして止める。

この世界で（元の世界でも）信仰が強かったら、無駄に危ない橋をわたるのと同じ。自分の身が危険にさらされるのは極力避けたい。

もし、宗教絶対な世界だったら？

間違いなく殺される。

「ああ、確かに好きだな。というか、おまえ・・・変なところで物知りだな。」

「アホの馬鹿だけどね。」

「現実、役に立たないけどね。」

「ひどおとおおとおお！！それでも生きるのに役立つんだよ！？多分この世界では頭いいほうだと思うぞ！」

元の世界で頭悪くても（平均丁度だけど・・・！）、21世紀の日本の教育なめんなよ！中世的な世界には負けないぜ！！

ふふふ、それにな。中世の人の一生の情報量は新聞1束程度なんだ！

・・・まあ、ここが中世かは知らんがな・・・。

「じゃあ、常識も知らない人に常識の問題を出そう。」

第1問、この国の名前と国周辺の名前を5つ答えろ。」

「知らんな。ふふふ」

「堂々と答えるな！？」

「そこまで馬鹿な人なんて聞いたことねえよ!？」

ザジャと双子男の子がそう叫んで、双子女の子は眉間に皺を寄せて呆れていた。

しょうがないじゃん!魔法とか無い世界で育ったんだから!有ったとしても2次元じゃん!!

3D映画とか3Dテレビとか3DSとか出てるけど……。

「とーにかーく!!知らないんですってばああああ!!」

「なぜそこで敬語になる。」

1番動揺してないのは双子女の子だな。ツツコム気力もあるらしい。

2人は頭を抱えそうな勢いだ。

と、

「盗賊だあああああ!!戦闘体制をとれええええええええ!!」
という叫び声が聞こえた。

なにこのタイミング……

「なっ!」

ザジャが立ち上がり腰にさしていた剣を握り引き抜く。

「ちょまってええええええええええええええ!!?」

自分でも信じられないほどの大きな声がでた。

しょうがないじゃん!!剣だぞ、剣!

RPGとかでよく見るのより派手さが無い……のは置いといて、容量オーバーなんだよ!

俺の頭では容量オーバーなんだよ!

あんなに刃先が鋭いんだぞ！ギラッ・・・ゴオツみたいな！！

「静かにしている！！」

激しい一喝がザジャから放たれる。

「ザジャさん一応私たちの足の紐取って。」

逃げないから、と付け足して双子女の子が言う。

ザジャは少し悩んでから、軽い動作で俺たちの紐を切っていった。
「取った分には生きて約束を守れよ。」

と、一旦息をついて、続けて凄み低い声で言う。

「逃げたら、どこまででも追いかけて地獄に落としてやるからな。」

ザジャは、俺たち1人1人を睨んで外に出て行った。

「で、どうすん？」

1番に口を開いたのは俺だった。

「緊張持てよ。」

うん。分かってたぞ。緊張感無さすぎ通越して明るすぎたのはね・・・。

「で、どうすん♪」

♪を付けて、言い直してみた。

「敵が来たら殺る。」

ズバッと言いましたよ、この子（双子男の子）！

今時の子はやくね（おばちゃん風）

「素手で？」

「他に何がある？」

「ええ、何もありませんとも。」

双子はふんつと鼻を鳴らして、ドアの両側に二人が着く。

「お前は真っ先な獲物だからそこにいろ。」

双子男の子が

「というか来る可能性あるの？」

「保険はあったほうがいいだろ？それに、いい買い手は希少だから。運が無くなる可能性を増やしたくない。」

真面目な顔で言われると少し悲しい気持ちになった。

その世界を、自分の世界として受け入れてしまつて、その世界が全てだと言われている気がして、悲しくなった。

（まあ、人それぞれなんだけどね。）

大きな音がした。地面がえぐれる音だ。

耳がきんつとした。馬車が小刻みに揺れる。

「なんか・・・ここに居るとやばくね？」

とにかく言ってみる。

だって、生命の危機感がむんむんするんだもん！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうだな。」

やや遅れて双子男の子、コクンと頷いたのが双子女の子。

五感でも危機感が感じるようになったら、後の行動は早かった。

「Bダッシュ！」

俺の声と共に、（一瞬双子が馬鹿にした顔をしたが）一気にドアを開け外に走り出した。

外は森だった。

1番は双子男の子、2番は双子女の子、次に俺

数秒全速力で走った。

いつの間にか、熱風と大きな音と破片が飛んできて、何が起ったか分からなかった。

見ると、あまり使われてなさそうな道に馬車はあった。

俺たちが乗っていた馬車の前の馬車が、原型が分からない形で燃えていた。

俺たちが乗っていた馬車は、後ろの部分は原型を留めていたが、

火に燃えながら崩れ落ちた。

馬が逃げ遅れ火だるま状態で嘶き暴れている。

映画さながらだと思う。

しばらく俺たちはその光景をぼーぜんと見ていた。

肩を掴まれ、現実に戻った。

振り向くと、すす汚れて血糊（返り血）がついたザジャがいた。

双子も現実に戻っていたらしく、俺の近くに立っていた。

「あゝ、これは隕石落下跡？」

そう思うしかない。とても小さい隕石が落下しました☆なら納得できる気がする・・・たぶん。

「紅蓮^{ぐれん}の跡だろ。」

「は？何それ？」

「そんなことも分からないのか・・・。」

溜息をつかれても分からんよ。

「まあ、これから後始末で使うから見て、自分で学習してくれ」

投げやりな言葉だったが、見れるならそれでいいと思い首を縦にふった。

「はゝ・・・通行手段がなくなっちゃったなゝ・・・。」

うんざりしたような声音でザジャが呟く。

「さっきのやつらの本拠地にあると思うから奪っちゃえ☆」

「・・・。」

あれ？俺の提案いいと思ったんだけど。

「・・・死に行けと・・・。」

と、双子女の子

「なんで!？」

「あれはこの国でもナンバー2の盗賊なんだぞ。それなりに人数もいて、腕利もいる。」

そんなところに奪いに行つた日にはこっちが殺られてるね。」

「ああ、そうなんだ。」

なゝる。そりゃ危ないね。

「まあいい、行くぞ。」

そう言うのと、ザジャは歩き始めた。

俺たちは付いていくと、1箇所血だらけの人が・・・積み重なっていた。

内臓が地面に落ちている。首が転がっている。すべてのモノが赤かった。

背中に冷たいものが流れる。

今まで死体を見たことの無い人にはやはり刺激が強すぎてゾツとする。

多すぎて人と認識できないのが幸いかもしれない。

ザジャが止まる。自然と俺たちも止まる。

死体から、半径10メートルぐらいの円状に人が止まっていた。

ある若い女性が死体から5メートルの所に出てきた。

数言葬儀らしいことを言うと、RPGなどで見る魔法陣を書き始めた。

意味の分からない文字と円が金色で書かれていくのは、見ている心が高ぶった。

40秒ほどで書きあがり、紅蓮、と呟くと、円の中心に金色の文字や円が集まる。

金色の文字は炎に変わる。紅い炎が出来上がると、すごい勢いで一直線に炎は死体の山めがけて飛んでいった。

大きな音と共に死体を燃やしていった。

燃える音が聞こえ、焦げていく嫌な匂いが鼻を突く。

「・・・それ・・・ファイヤーボールでしょ。」
呟いた声は燃える音にかき消された。

1. ふぁいやーぼーるっ♪(後書き)

うおおおおおおおおおおおおお！

7000文字超えたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

やれば出来る子！！

中世の人の情報量は本当です。

調べれば出てきますよ^^

・・・・けど、少しおぼろげなので1部じゃないかも・・・

あと、途中で書き方が変わってしまいました。

書き方にひかれたかたごめんなさい。

多分このままだと思います。

|||||

誤字脱字がありましたら、ご報告ください。

感想もお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5320u/>

異世界で奴隷になりました。―あれ？これって最悪パターンじゃね？―

2011年8月13日03時32分発行